

平成 29 年度 第 2 回 高校生川柳 受賞作品 講評

大賞	【句】抱き合っ て 共によろけて 笑い合 う	作) 岩井 ののか 様 (岐阜各務野高等学校)
	<p>【講評】一瞬の肉体の動きを写真のスナップショットのようにとらえています。しかも、～して、～してと、2つ動作を重ねることでこれから何かが起こることを読者に予感させます。そして、そのクライマックスに、二人の笑いをもってくる。それによって、描きたかったことは肉体の動きではなく二人のところがひとつになる点であることがはっきりとわかります。リハビリを受けるようになってしまった困難ですらふき飛ばしてしまう人と人との心のふれあい、そのテーマ設定のすばらしさ、さらに肉体と心、動と静の対比という作品としての技巧性の高さもまた評価されました。</p>	
傑作賞	【句】また明日 そう言えること 幸せだ	作) 東 瑠香 様 (松阪商業高等学校)
	<p>【講評】フランスのノーベル文学賞作家ロマン・ロランはジャン・クリストフという音楽家の生涯をえがいた作品の中でつぎのような言葉を残しています。「毎日が今日の空のように、灰色の雲に覆われ、重く、つらい日々であっても、今日という日を愛し、感謝して生きなければならない」この作者のように日々感謝して生きることの大切さ、前向きな心をこれからの高校生活、そして大人になってからもずっと持ち続けて欲しいと思います。</p>	
傑作賞	【句】「ゴキブリだ！」 そういう時だけ 「お父さん！」	作) 小原 愛可 様 (松阪商業高等学校)
	<p>【講評】突然ゴキブリが目の前に現れる時、ほとんどの人は冷静さを失います。自らほうきやスプレーで逃げ回るゴキブリと格闘する人、この作者のように反射神経的に他の人に助けを求める人、反応はさまざまです。「だけ」という部分で本当はお父さんを頼りにしている娘さんとお父さんの微妙な関係も想像できるようで微笑ましい作品です。読み上げるとわからないのですが、文字にするとビックリマーク（エクスクラメーションマーク）が入っている点もゴキブリに遭遇したときの驚きがうまく表現されていていいですね。川柳らしい作品でした。</p>	
傑作賞	【句】乗車位置 朝の電車は 同じ顔	作) 中村 絵馬 様 (岐阜各務野高等学校)
	<p>【講評】一日の始まり。少し、緊張しつつも駅のホームで電車を待つひととき。なぜかいつも同じ電車、同じ号車の列に並んでしまう・・・ふと気づくと周りも同じ顔ぶれ。とくに話しをするわけでもないけれど、「袖触り合うも他生の縁」ともいいますが、不思議な連帯感も湧いてきたのでしょうか。審査員の中には「その中にきっと気になるだれかがいたのでは」という意見もありました。乗車位置という硬い言葉を効果的に使って日常風景をうまく詠っている点が評価されました。</p>	
傑作賞	【句】鶴折ると 私の心が 表れる	作) 岩井 ののか 様 (岐阜各務野高等学校)
	<p>【講評】病気やケガなどのお見舞いのときに鶴を折るという習慣があります。鶴を折るときは雑念が入れば、たちまち出来ばえに表れます。切れ字を使って「鶴折ると表れる私の心かな」と俳句風にも書き換えられます。しかし、この作品はそうした技巧を排除し、思うところをストレートに表現した現代風の作品になっています。それによって作者のお見舞する人への気持ちを大切にしたいという思いと同時に、自分を律せねばという凜とした修行者のような内面が伝わってきます。</p>	
傑作賞	【句】飲食店 初めて気づいた 親の苦勞	作) 岩田 安未 様 (啓明学館高等学校)
	<p>【講評】外食産業は大手のシェア獲得合戦による過当競争から、粗利も十分取れず、売れ残ればすぐに損失につながる、非常に経営の難しい業種です。そんなお店を切り盛りすることの大変さにアルバイトに入って気づいたのでしょうか。学校の中だけでは見えない社会の厳しい現実を垣間見ることはとても重要な学びであり、社会人になる準備になります。そこから親の苦勞を類推する作者の思いやりと気付きの良さも見える作品です。</p>	

傑作賞	【句】 琉球の 自決は二度と おこさない	作) 小寺 彩斗 様 (揖斐高等学校)
	<p>【講評】大戦末期の沖縄戦の悲惨な状況を学ぶ機会があったのでしょうか。それほど遠くない過去に現実に起きた歴史を、これからの世の中を担う若い人は忘れて欲しくないと思います。「二度と起こさない」という作者の強い決意のような言葉を読み「再び戦争の惨禍が起ることのないやうにすることを決意し(中略)ここに主権が国民に存することを宣言し、この憲法を確定する」というわが国の憲法前文を思い出しました。終戦から70年以上が経過し、本学の教員もみな戦後生まれとなりましたが、若者である作者が作ったこの作品にふれ、大人のわれわれもその歴史を忘れてはならないと思いを新たにす、そんな力をもった作品です。</p>	
傑作賞	【句】 冬茜 学級日誌 書き終える	作) 北川 順子 様 (豊橋西高等学校)
	<p>【講評】この句の後半部分「学級日誌を書き終える」、これだけならば、たんなる事務的な報告になります。しかし、冒頭にたったひとつ「冬茜」という言葉が配置される、それだけで情感あふれる命が吹き込まれます。日が沈む時間帯、夕焼けが一日の終りを告げる。しかし、冬の夕焼けは短かく、つかの間のひととき。夕暮れを人生に重ねて無常観を感じる人も多い。作者にとっては高校生活がいつの間にか過ぎてゆくことをふと感じた瞬間だったのかもしれない。</p>	
傑作賞	【句】 目が合えば 黒板向けと カラス言う	作) 伊藤 圭佑 様 (津田学園高等学校)
	<p>【講評】雀や鳩にくらべてカラスは鳥類の中でも飛び抜けて知能が高い鳥とされます。そんなカラスと至近距離で目が合えば、ひょっとしてこちらのことがわかってるのかな、などとも考えてしまいそうです。授業中なのにあらぬ方向を見ながらぼんやりしている作者さん、カラスにそんなこと言われないうにがんばりましょう。川柳としてのユーモラスさが評価されました。</p>	
傑作賞	【句】 滲む目と 遠く細い 大歓声	作) 伊藤 咲那 様 (東海商業高等学校)
	<p>【講評】試合に勝った瞬間でしょうか。滲む目という言葉で勝利の歓喜が抑えきれない様子が伝わるのですが、遠くという言葉でなぜか作者はすこし離れた場所にいるようにも思えます。他のメンバーの声だけが聞こえる。不思議な光景です。しかし、実際はそうではなく、その場にいるのに勝利で感極まって歓声が聴こえなくなっている様子を表現しているのかな、とも考えました。鑑賞する者を不思議なイリュージョンの世界に引き込むのも、この作品の魅力です。</p>	
傑作賞	【句】 道聞かれ とっさに答えた 違う道	作) 東谷 萌花 様 (松阪商業高等学校)
	<p>【講評】知らない人に声をかけられ、思わず緊張してしまい、さっと答えたものの、その人が行ってしまってから間違いに気づく。きっとだれにでもある体験かもしれません。しかし、そうした状況を文字数の制約がある短い句で表現することは必ずしも容易なことではありません。この作品が評価されたのは、だれにでもある体験をテーマに選ぶことによって読者への理解のしやすさをはかられている点、さらに道という言葉で最初と最後に持つことで、表現としての簡潔さ、わかりやすさが工夫されている点です。</p>	